

退職者の挨拶()

北角 至

このたび3月31日をもちまして、退職をいたしました。顧りみますと、昭和39年に入庁以来、水産試験場にてそのほとんどを環境調査等の業務に専念させていただきました。この間、多くの方々には公私にわたり温かいご指導とご厚情を賜り、職務の遂行ができたことを心から感謝しお礼申し上げます。

試験研究業務としては、海域では内湾や浅海の養殖場環境調査、諸開発に伴う水質・底質調査、有害・有毒プランクトン調査、内水面では長安口ダムのシラスアユ調査、吉野川のアユ漁業実態調査など、県下一円の海域や主要河川を対象とした仕事に携わってきましたが、その都度、多くの関係者にお世話になり、良き思い出となり強く印象に残るところです。

この長き間には、紀伊水道の浅海域は、諸開発により埋め立て造成・導流堤・防波堤など多くの構築物がきづかれ変貌しましたが、なお、諸工事が計画されており、これらの構築物が水産生物をはじめとして諸生物の生息・生産に大きな影響がないことを願うところであります。

海は陸上と違い未知なる部分が多く、水産業の振興に難しい面が多々ありますが、水産業が持続的に発展し豊かな海の存続できるよう、皆様のご活躍とご健勝を祈念いたし、退職のご挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。



赤潮プランクトンによる魚類攻撃試験実施中

退職者の挨拶()

栽培漁業で30年 -

小島 博

経済の高度成長は、埋め立て、工業化、都市化を急ぐあまり陸の汚水を処理しきれず、瀬戸内海をヘドロの海に変えてしまった。おぼけハゼを作り、釜揚げするとコペポダで腹の赤いましらす、脂ぎったいりこ、まだ当時利用価値の低いシャコの大発生などすっかり海が病んでしまった。そのさなかに水試職員になった。私に与えられた最初の業務は、本県真珠養殖の終焉調査、始まったばかりの本四架橋の漁業影響調査など委託調査に平行して、クルマエビの放流効果やクロアワビ種苗生産など栽培漁業技術開発であった。高度成長政策は、稚仔期の「ゆりかご」である藻場や渚を破壊したが、栽培漁業は、「ゆりかご」を陸上に移した点ではその代償もかねていた。農漁村は、働き手や後継者を都市や建設現場へ取られたが、活発な工業化は漁船や漁具・偽装を近代化させ、労働力不足を補うことを可能にした。漁場づくりにも税金が回された。好景気と工業化が資源増殖を可能にするとして、海底牧場計画なる非科学的な似絵、人間の観念を、自然に押しつける仕事にも携わった。荒廃と夢が同居した活発な時代でもあった。その後、マダイの栽培、ヒラメの栽培、トラフグの分布回遊、イセエビの増殖、藻場の維持管理技術、マダカアワビやメガイアワビ、アカナマコ・アカウニ・トコブシの栽培化など、気が付いたら、この春退職するまでの30年間、重油流出や赤潮など必然的に発生した嬉しくない事件調査など多くの事業を経験したが、筋の通った仕事は栽培漁業であった。

栽培漁業の定義は人によりまちまちである。私は、人工種苗を自然海に放流して、漁業を成り立たせている資源を維持する技術の総称なのだ、と勝手な思い込みをしている。栽培漁業は、私たちの実践により内容が豊かになり、定義が変わる言葉である。人々の努力は、保全法として瀬戸内海を少しだけ回復させた。栽培は自然再生にも活用可能な技術である。多くの友と、栽培漁業技術の推進に係われたことを誇りに思っている。人工種苗由来の魚介類の生産金額が放流諸経費を上回るかどうか、矮小化した放流効果論が盛んである。技術開発は果てがないものと思うのだが、栽培漁業技術が完成していることを大前提に栽培漁業無価値論まで飛び出している。本県の生態学的な環境下で、栽培技術が発揮可能な種の再検討は要る。

また、これからの研究課題は、水産資源が持続的に維持される(再生産と呼ばれる)、漁業から見れば持続的に漁獲(生産)される状態とはどのようなことなのか、漁業と生物資源の両面から明らかにすることだろう。そのために、高価な人工種苗をいかに活用するかがこれからの栽培漁業の新しい課題だ。生物資源は豊凶があり、そのために一喜一憂することは昔から続いている。漁業は、自然に挑み、自然と共存する、人類最後の狩猟産業とも言われる。人間の浅知恵が通用しない漁業の仕事は、本当に興味が尽きない。多くの漁業組合の方々から漁業や資源のことを教えていただき、科学的な夢を持ち続けることができた。私の仕事に連関した全ての人々に心から感謝したい。



オーストラリアで研究者仲間と